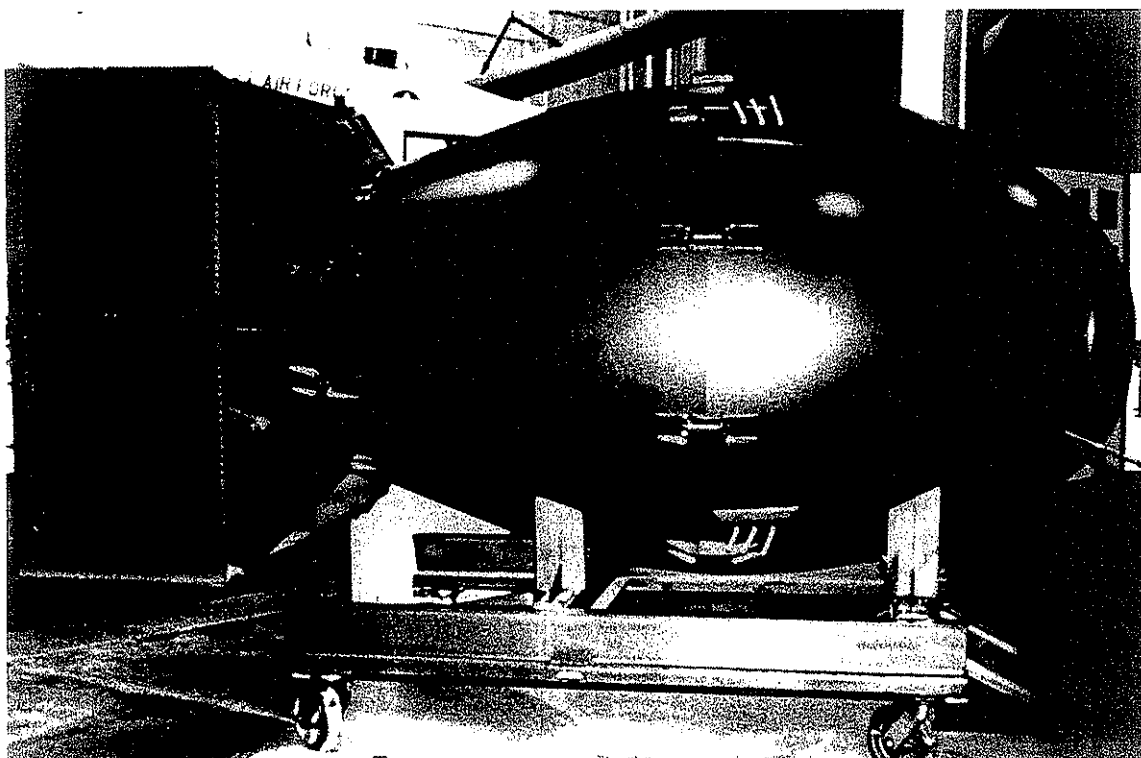


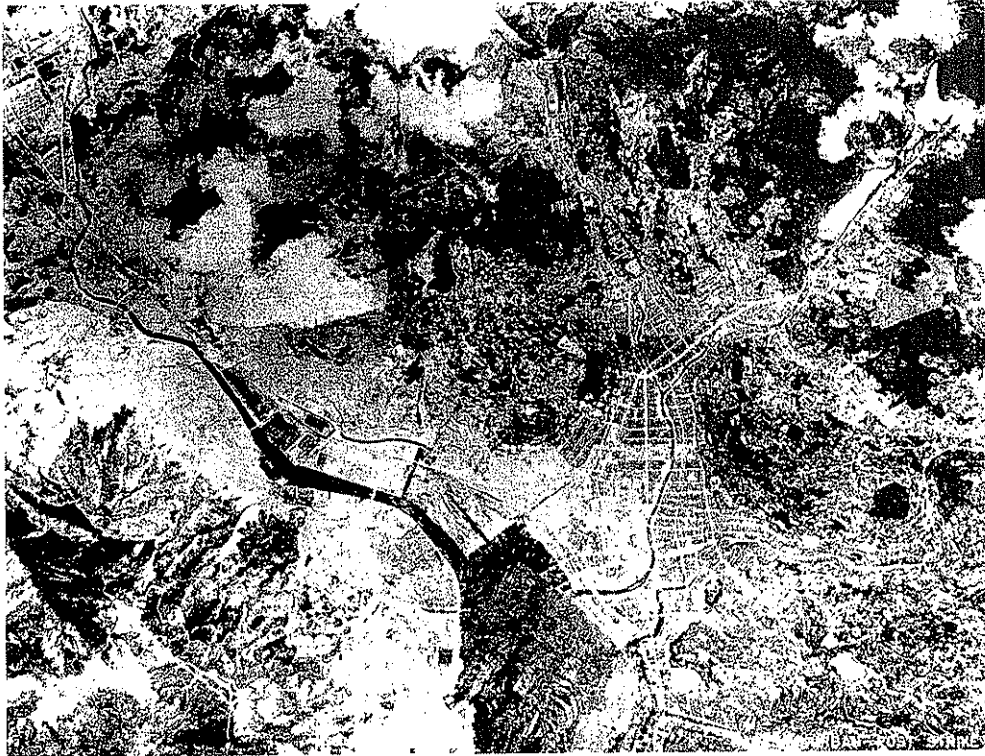


立ち昇るきのご雲
 (米軍機から撮影)

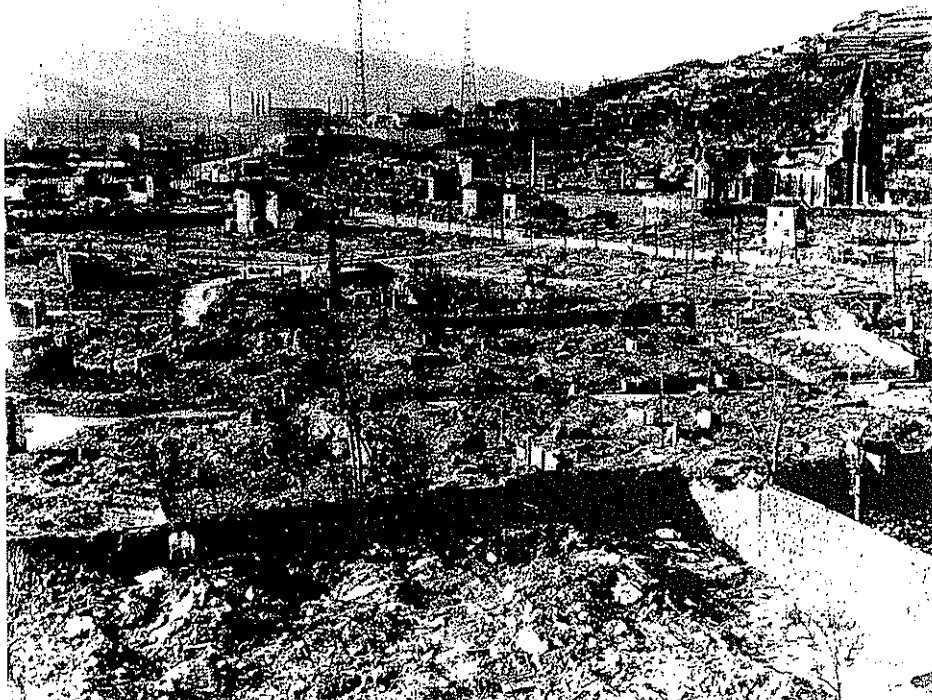


長崎型原子爆弾の模型

ファットマン(でぶ)と呼ばれる。



被爆直後の長崎市街
(飛行機から撮影)



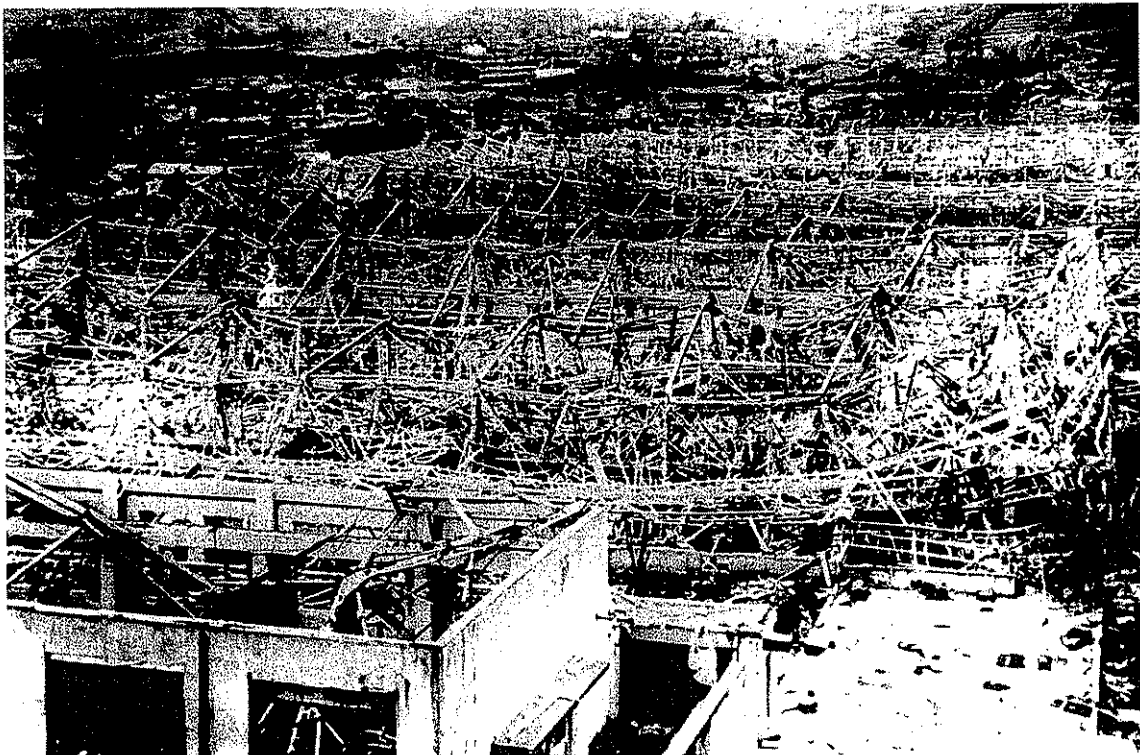
長崎駅付近の被害

右が中町天主堂、中央に見えるのがNHKのアンテナ。



長崎医大附属病院

コンクリートの建物は外側だけ残ったが、中ではたくさんの人が死んだ。



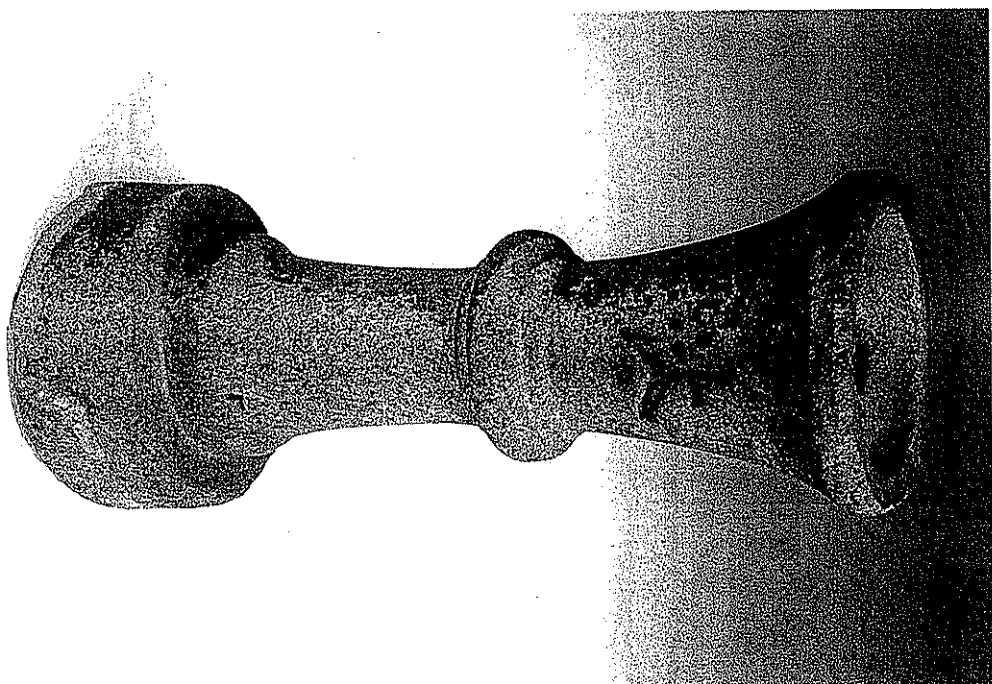
三菱兵器大橋工場の被害

(現 長崎大学本部)



大村海軍病院 (現 国立病院)

運びこまれた少女の皮ふは、ぼろ布のように垂れ下がっていた。



花崗岩の献花台

爆心地から450m/村木町 佐留寺

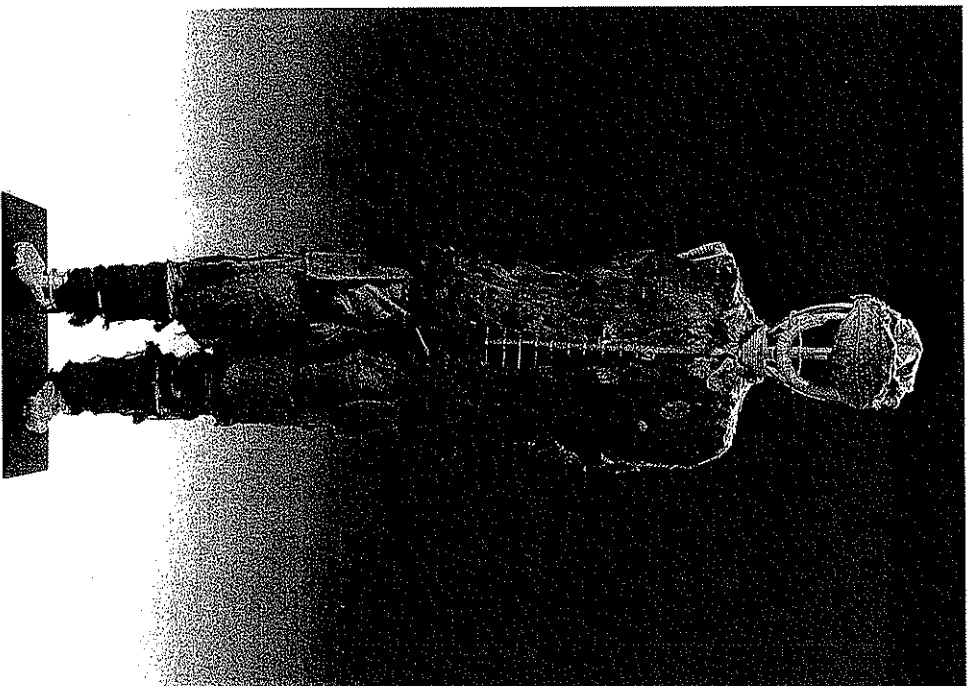
熱線を受けた面の石英は、汚れた表面がはじけ飛んで白っぽくなりました。このような現象は、爆心地から1キロメートルの地点にまで見られました。



溶けた仏像

【所在地】 畑心地から500m/左宮町 須原寺 (京都広吉氏菩提)

爆風で台座から吹き飛び、火災により前面が溶けてなくなりました。



3人の中学生の遺品

【所在地】 畑心地から900m/小瀬町

市立中学校の1・2年生は、建物疎開作業中に被災し、多くの犠牲者を出しました。これは、同校の3人の生徒が身につけていたものです。

【帽子（ベリト）】 津田露吉氏寄贈

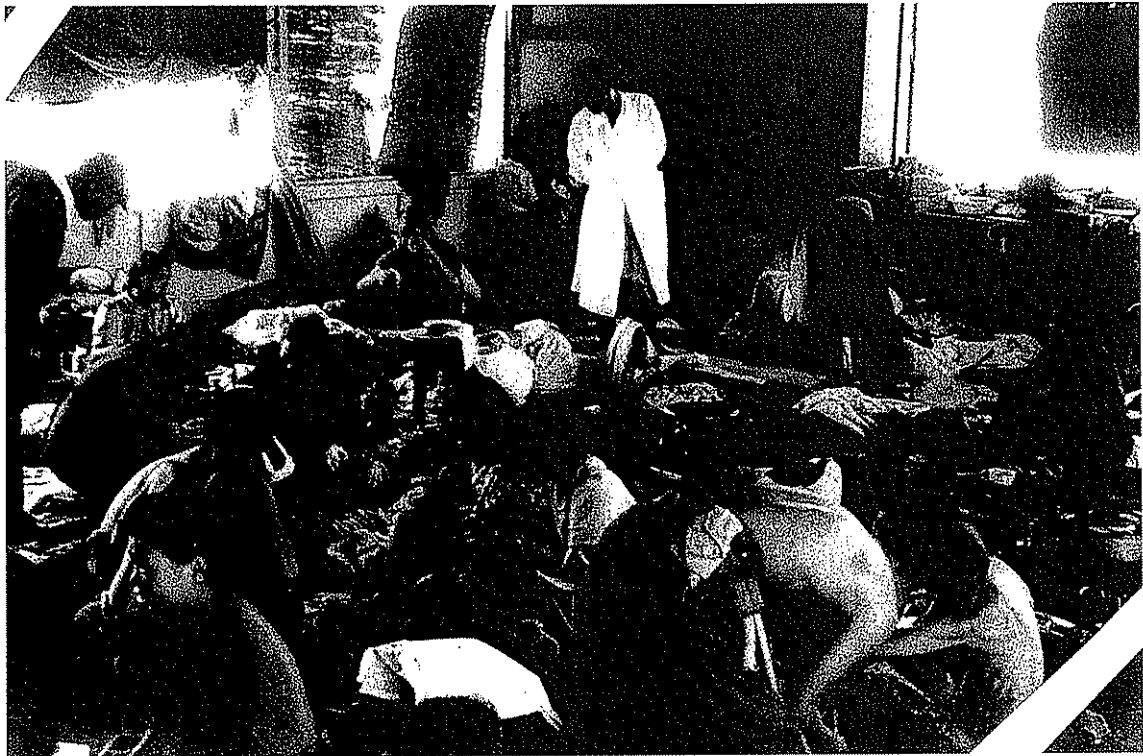
1年生の津田露吉さん(当時13歳)は、翌7日昼飯、遺体の天竺鯛付近で交際により発見された。服は赤くくくれ、靴上側に大きな穴があき、袖口の生地はかわりにはたきでした。

【学生服】 福岡重春氏寄贈

2年生の福岡重春さん(当時14歳)の遺体は掘削されていきましたが、遺体を引寄せた際の遺品が服からあり、足指ももらいたけさしたがいず、それらのものがわからぬ遺品でした。学生服は、左胸についていた名札が落ちてくれたもので、同一の型紙の遺品と取りました。

【グートル】 上田牛三氏寄贈

1年生の上田正之さん(当時12歳)は、疎開の遺品箱まで運んだところを、たまたま遺品所の人に知られました。全身の皮膚が剥け下がるほどの大出血を思い、「お母さん、お母さん」と叫びながら泣きだしたそうです。遺品に衣類はほとんどなく、足指ももらいたけさしたがいず、それらのものがわからぬ遺品でした。



負傷者でいっぱいになった救護所

陸軍船舶司令部撮影 広島原爆障害対策協議会提供
第一国民学校 萩原山崎町(爆心地から2,600m)

救護所には、次々と負傷者が運ばれ、すきまのないほどの人であふれていました。
救護所の多くはベッドがなく、むしろやゴザ、畳を敷いてその上に人々を寝かせていました。



苦しむ負傷者

陸軍船舶司令部撮影 広島原爆障害対策協議会提供
第一国民学校 萩原山崎町(爆心地から2,600m)

負傷者の多くは、ひどい火傷や外傷を負い苦しんでいました。
備蓄されていた医薬品や衛生材料はすぐに使い果たし、赤チンや食用油を塗るだけの応急処置が精一杯でした。

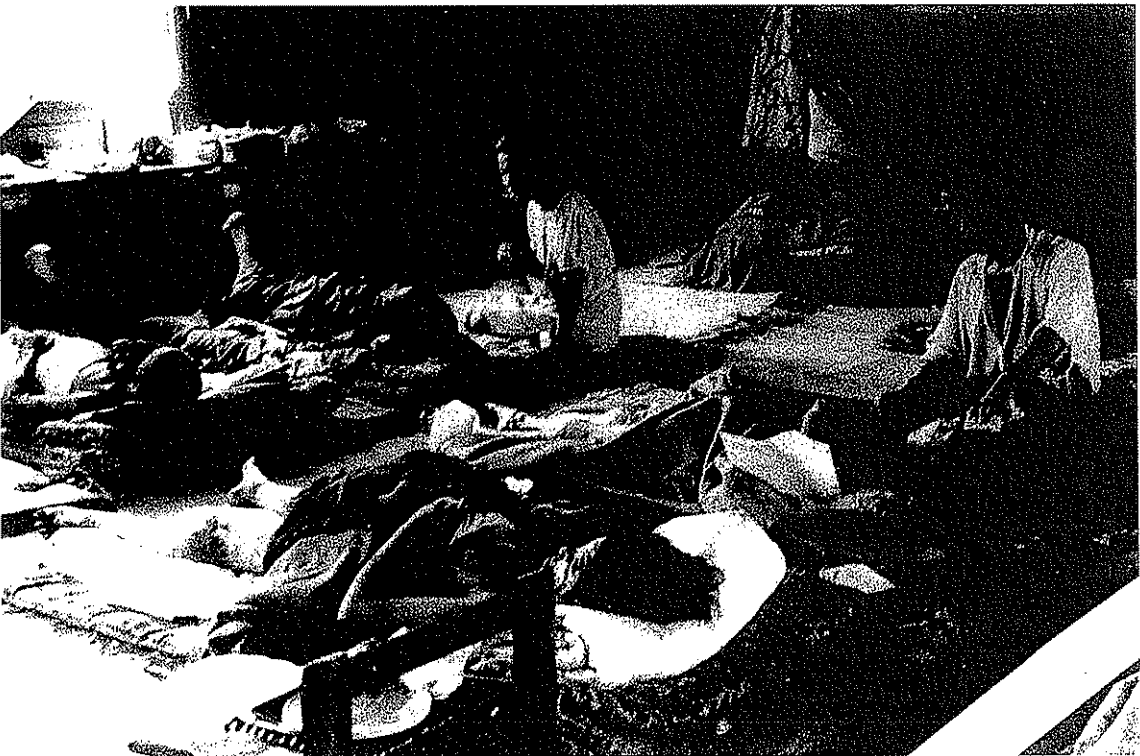


絶え間なく続く治療

陸軍船舶司令部撮影 広島原爆障害対策協議会提供
第一国民学校 段原山崎町(爆心地から2,600m)

治療を行う医師や看護婦も十分ではありませんでした。

各地から来た救護班がそれぞれの救護所に割り当てられました。負傷者は次々と収容され、治療は絶え間なく続けました。



懸命の看護を続ける人々

陸軍船舶司令部撮影 広島原爆障害対策協議会提供
第一国民学校 段原山崎町(爆心地から2,600m)

家族の回復を願って懸命の看護を続ける人の姿がありました。

しかし、家族の迎えを待ちながら看とられることもなく、孤独のまま亡くなる人も数多くいました。